

第3回 戦没者遺骨の所属集団の鑑定及び鑑定方法の検討等に関する専門技術チーム (概要)

日 時：令和2年2月19日（水）13:30～15:30

場 所：厚生労働省17階 専用第20会議室

出席者：浅村主査、浅利構成員、北川構成員、坂構成員、坂上構成員、山田構成員、重井氏（代理）

概 要：

1. 収集手順班及びDNA鑑定班での議論について

- ・ DNA鑑定の試料については、収集手順班において、どの程度のものが適するのかが議論になった。形質の鑑定人に対して、研修等を行う必要があると考えている。
- ・ 形質、DNAの双方の手段でも日本人の遺骨かどうか分からない可能性もあるが、どう対応していくか。戦後から長い時間が経つ中で、そういった事案は増えると思う。
- ・ 形質の人材育成について、技術を身につけるには、まったくの知識0からの場合、フィールドに立てるレベルまでに1～2年くらいかかる。

2. 収集、鑑定の手順案について

- ・ 検体採取部位について、大腿骨でもDNAが出ない事例があった。歯や大腿骨など以外からは出ないのではないか。
- ・ STRでの分析で、日本人の遺骨である可能性が低い場合でも、次世代シーケンサにかければ日本人の遺骨であると判定できる可能性もあるのではないか。
- ・ 次世代シーケンサで戦没者遺骨を分析した事例がなく、今後やってみる必要はあるが、新しい技術であり、コストも大きい。データも少ない。まだ実用化されていないので、「標準」と言えるのか。トライアル的にやって、確証を得ていきたい。

3. 個体性のない細かい骨片の取扱等について

- ・ 形がしっかり残っている遺骨については、やってみないとわからないが、骨片からはまずDNAは出ない。もろいものもDNA鑑定にそぐわない。
- ・ 全部持ち帰って、形質とDNAの専門家で議論すべきだが、現実的にはどうか。
- ・ DNA鑑定側は与えられたものをやるのみ。収集の側で現実的な方法を考えていただきたい。
- ・ 御遺骨の保管方法について、今は現地協力者の方が保管しているが、保存状態がいいとは言えないのではないか。しっかりとした霊安室を整理・検討すること。
- ・ 鑑定に要する時間については、どれくらいの試料があるかや、今後の鑑定体制による。ただし、次世代シーケンサ等が加わると、その分遅くなる。